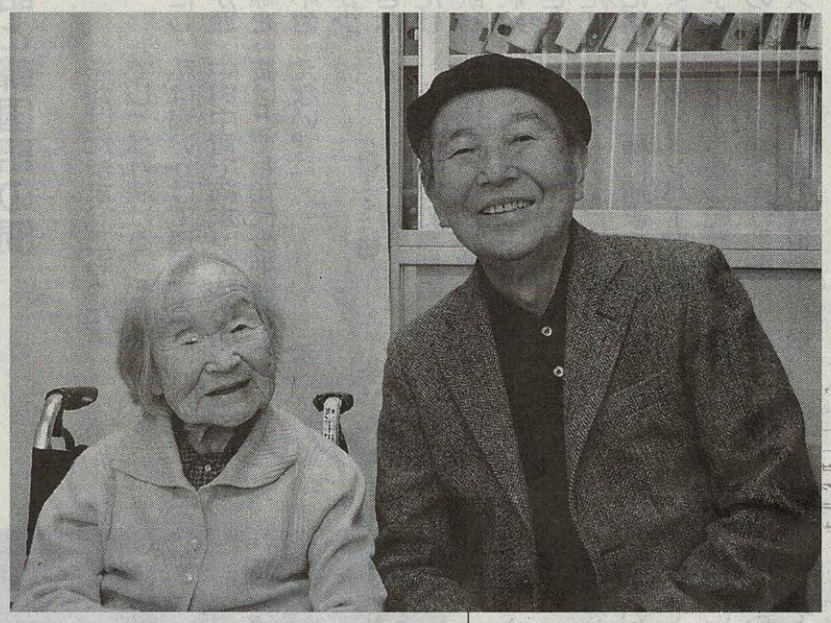
東京大空襲で家族失い 戦災孤児を育て続けて

鎌田十六（とむ）さん（107歳） 安らかに

東京大空襲・戦災資料センター前館長、作家 早乙女勝元さんが追悼



鎌田さん（左）と早乙女さん＝2018年２月26日、東京都内

1945年3月10日の未明に、下町を焼き尽くした東京大空襲。幼い一人娘、夫、母を亡くし、長く戦災孤児を世話してきた鎌田十六さんが、今月初めに亡くなりました。東京大空襲・戦災資料センター前館長で、十六さんとゆかりの深かった作家の早乙女勝元さんに、思いを書いてもらいました。

鎌田十六さんが、この11月2日に亡くなった。107歳だった。

いつか、こういう日が来るだろうことはわかっていたが、亡くなったという第一報は、私を打ちのめした。

十六さんは、3月10日大空襲に生き延びた若い母親で、当時は蔵前2丁目の家に、夫と母と生後7カ月の早苗ちゃんと、4人家族だった。その日は猛突風の吹きすさぶ寒い夜だった。空襲のサイレンも鳴らないうちに、米軍重爆機B29が次々と巨大な翼を広げて下町一体に焼夷（しょうい）弾をぶちまけ、北風にあおられた火の手は、みるみるうちにわが家へと迫ってくる。

身を切る水中で 火の粉を防いで

十六さんたちは家を出て、退路を探したが、どこもかしこも火焔（かえん）が渦巻いている。彼女は赤子を背に入り江のある隅田川へ。そこで母と夫を見失う。身を切るような水中で火の粉を必死に防いで数時間がたち、やっと目の出となる。岩壁をよじ登り、最寄りの小学校の避難所にたどりついたが、早苗ちゃんは冷たくなっていた。彼女が助かったのは、おぶっていた背が赤子のせいで、水の入る隙間がなかったせいだろう。

東京大空襲・戦災資料センターに寄贈された早苗ちゃんの着物。センターは今年7月にリニューアルオープン。展示コーナーも充実させています（写真は2015年撮影）

それから連日のように母と夫を探し、やっと水中に沈んでいた夫を発見、その場で火葬する。母は行方不明のままだった。3月10日の死者は10万人にも及ぶ。十六さんの住んでいた現台東区の死者は1万7664人だ。どれだけ大勢の子が親と引き裂かれ、子は親を見失ったことだろう。

一度は信州の実家に戻ったが、上京した折に上野の山で、多数の戦争孤児に出会い、その子どもらの養護施設で働くこととなる。70歳まで働いたが、十六さんは言った。

「自分の子が、私の代わりに育ててやってと言ったような気がしたのよ」

なぜ戦争なんか始めたのかと…

彼女の住む街には、新日本婦人の会国分寺支部があって、定期的に発行する戦争体験文集が出ている。ある時手にした文集で、鎌田さんの記録を読んだ私は、あまりの痛ましさに息をのみ、彼女の戦後の生き方に胸をうたれた。何度かお宅までうかがって、体験記の不足分を補ったりしているうちに、早苗ちゃんのねんねこはんてんなどがきちんと保存されているのに気づいて、私ども民立民営の東京大空襲・戦災資料センター（江東区北砂）に提供していただいた。今も特別のガラスケースの中にある形見の遺品は、訪れる人の涙をさそう。

十六さん、よく今日まで、がんばりましたね。優しかった年下の夫と、行方不明のままの母と、早苗ちゃんの分まで生きられたのではないでしょうか。

「なぜ戦争なんか始めたんでしょうね。始めた人は、私らみたいな者のことを、お忘れになったんでしょうねえ。昔も、今も」

かすれた声でそう言ったのが、私には忘れられない。

十六さん、あの世で早苗ちゃんやみなさんとも遭えたことでしょう。どうか安らかにお眠りください。

鎌田さんと早乙女さんの共著『語り継ぐ東京大空襲　3月10日、夫・子・母を失う　炎の中、娘は背中で……』（本の泉社・税別476円）